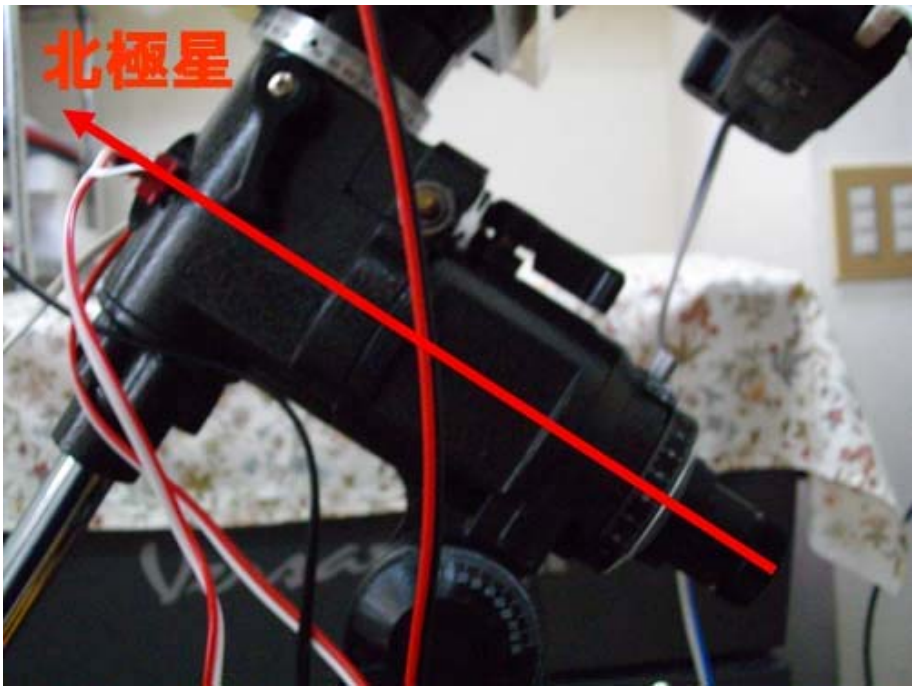
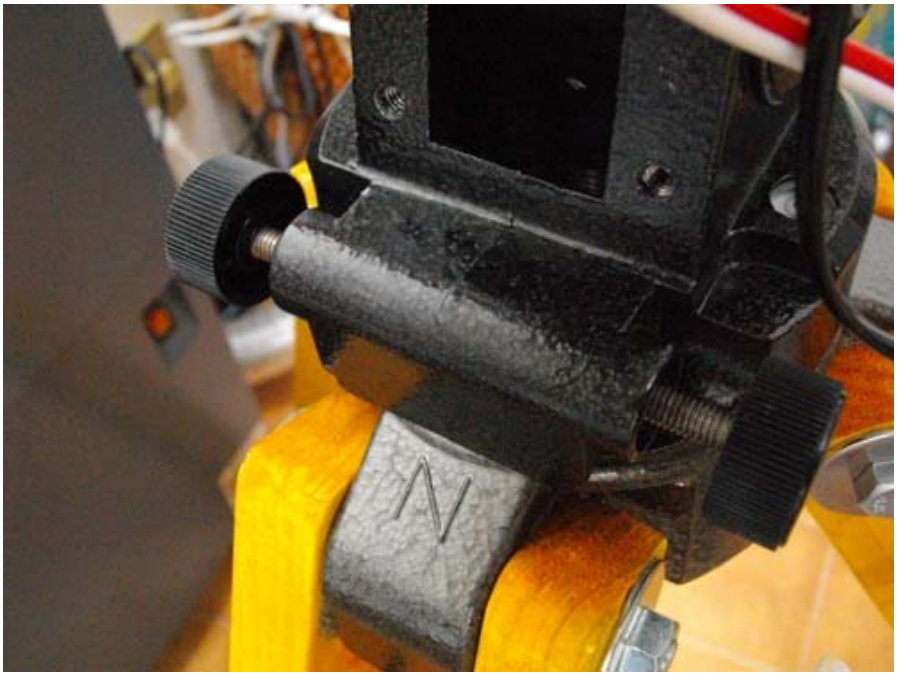
撮影マニュアル

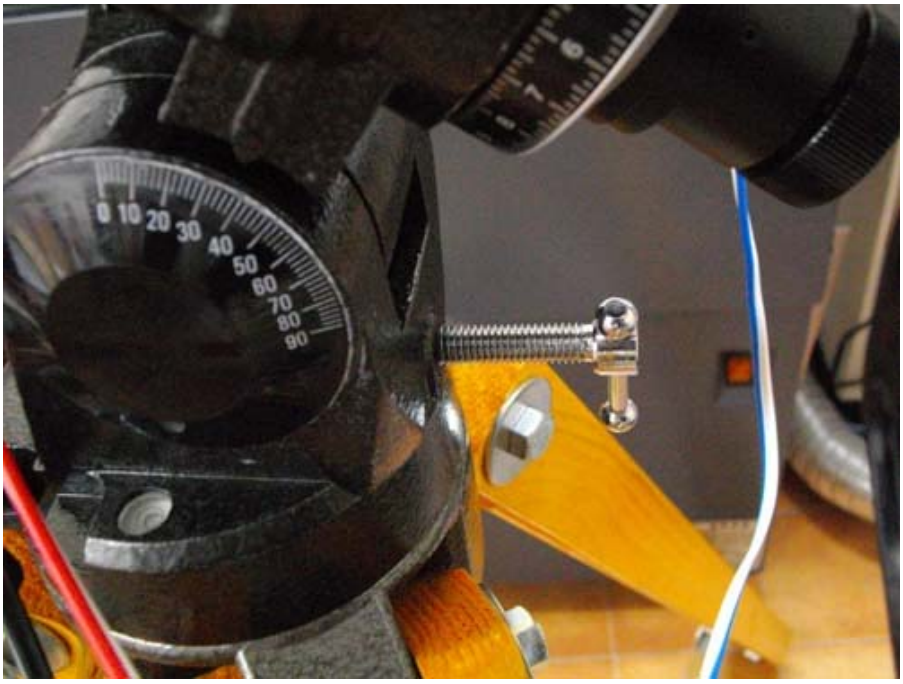
極軸をあわせる



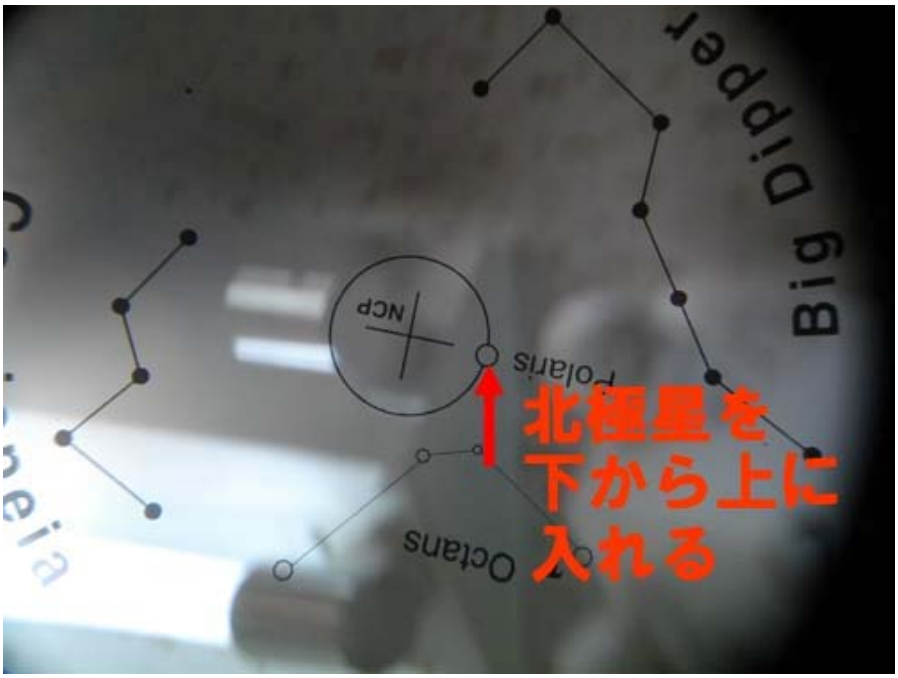
極軸望遠鏡を覗いて、北極星を導入しますが、



水平方向はこの 2 本のネジで合わせますが、最初は両方とも緩め、手で赤道儀を振って、北極星を視野内に入れます。視野内に入ったら、ネジで微調整します。



高度はこのネジで調整します。締めると、上に向きますが、緩めても軽いので、下に向かない場合があります。この場合は手で押してやります。

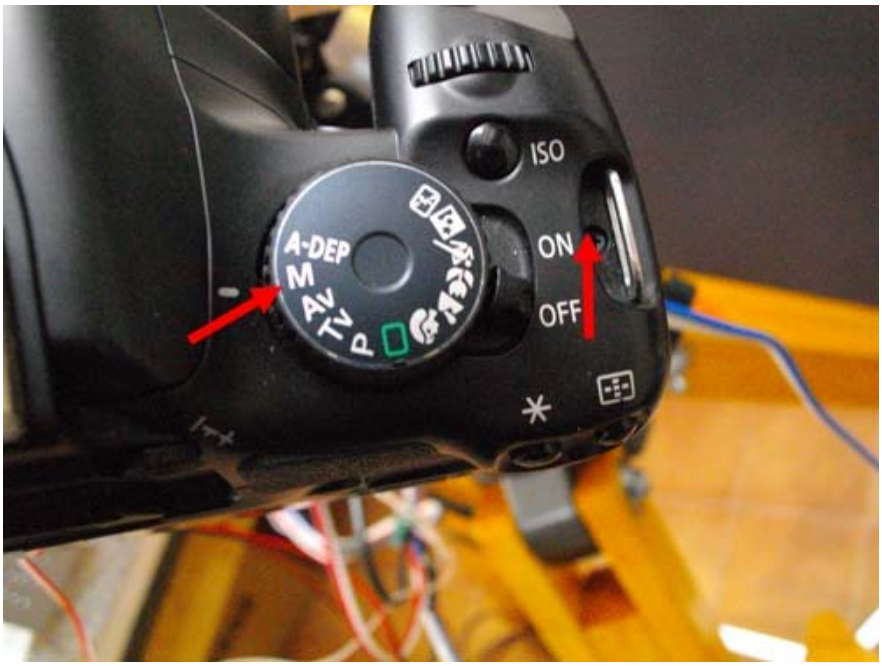


北極星が視野内に入ったら、赤経軸を回して、カシオペアと北斗七星の位置を肉眼で見える位置と同じにします。そして、水平微動ネジ、高度微動ネジで、Polaris の○の中に北極星を導入しますが、上下方向を合わせる場合は、高度微動ネジを締める方向、つまり、下から上に北極星が移動する向きで導入してください。上下方向にガタが残る可能性があります。

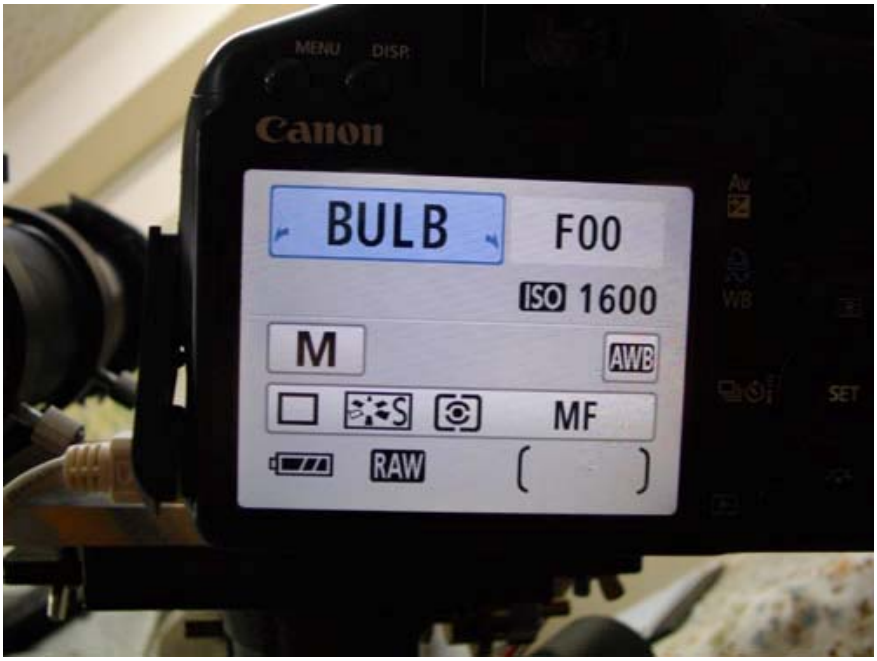
極軸をあわせたら、三脚と赤道儀の結合ネジをきつく締めます。
以上で極軸あわせが終了です。

カメラの設定

カメラのアイキャップをとります。このキャップはダーク撮影の時に必要なので、なくさないようにします。

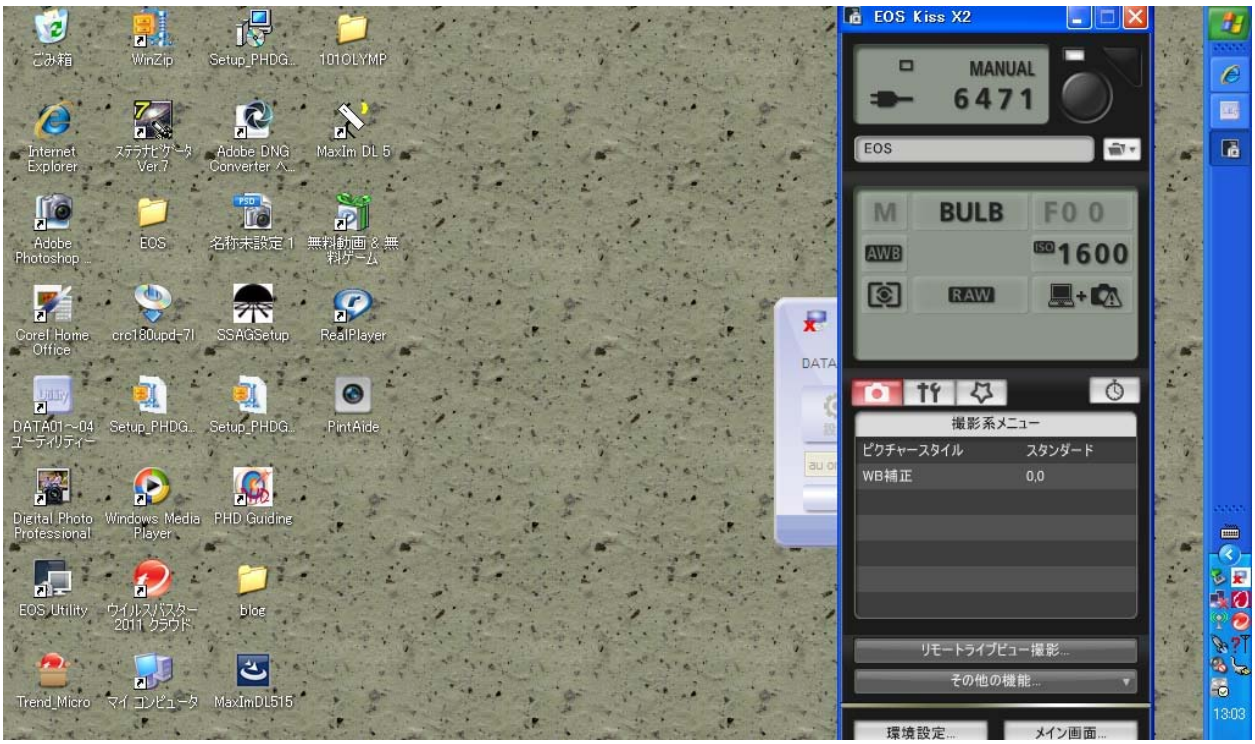


カメラのモードがマニュアルであることを確認して電源を入れます。



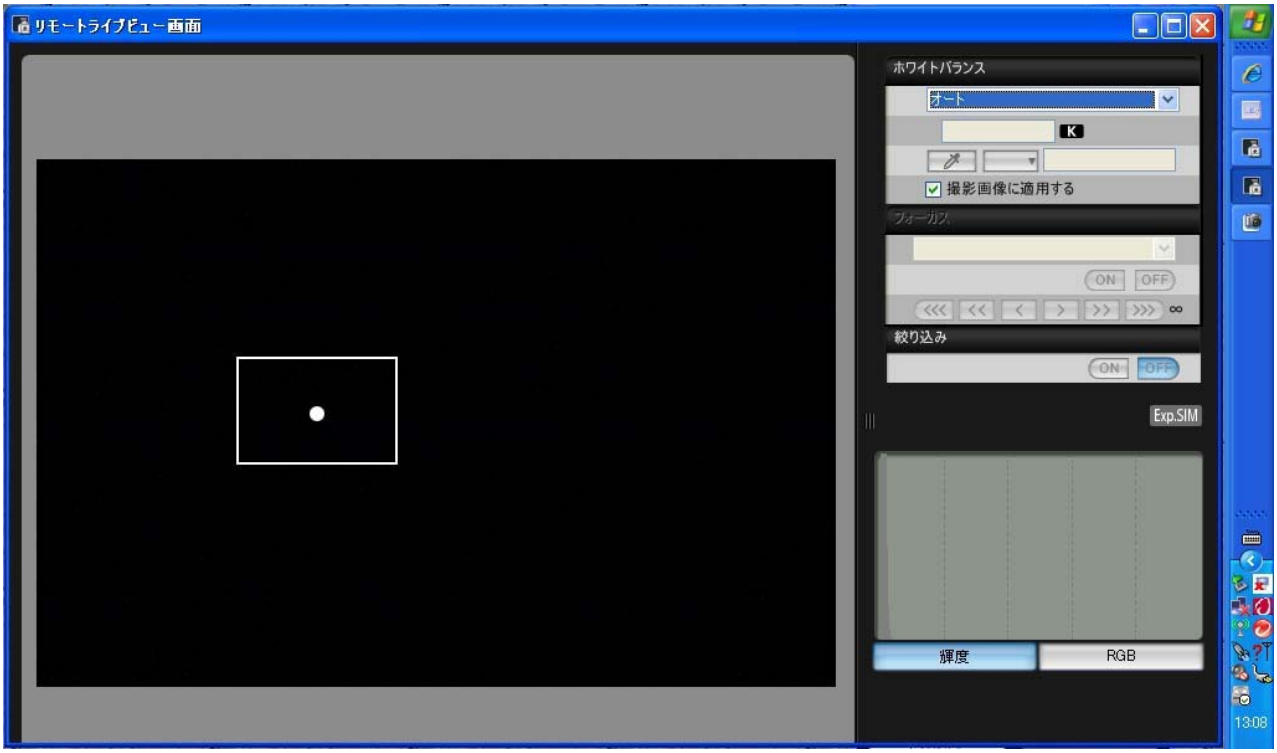
シャッターが BULB、ISO1600、RAW モードなどを確認します。

以上で、カメラの設定は終了です。次にピント合せをします。カメラとパソコンを USB ケーブルで接続し、EOS ユーティリティを起動します。

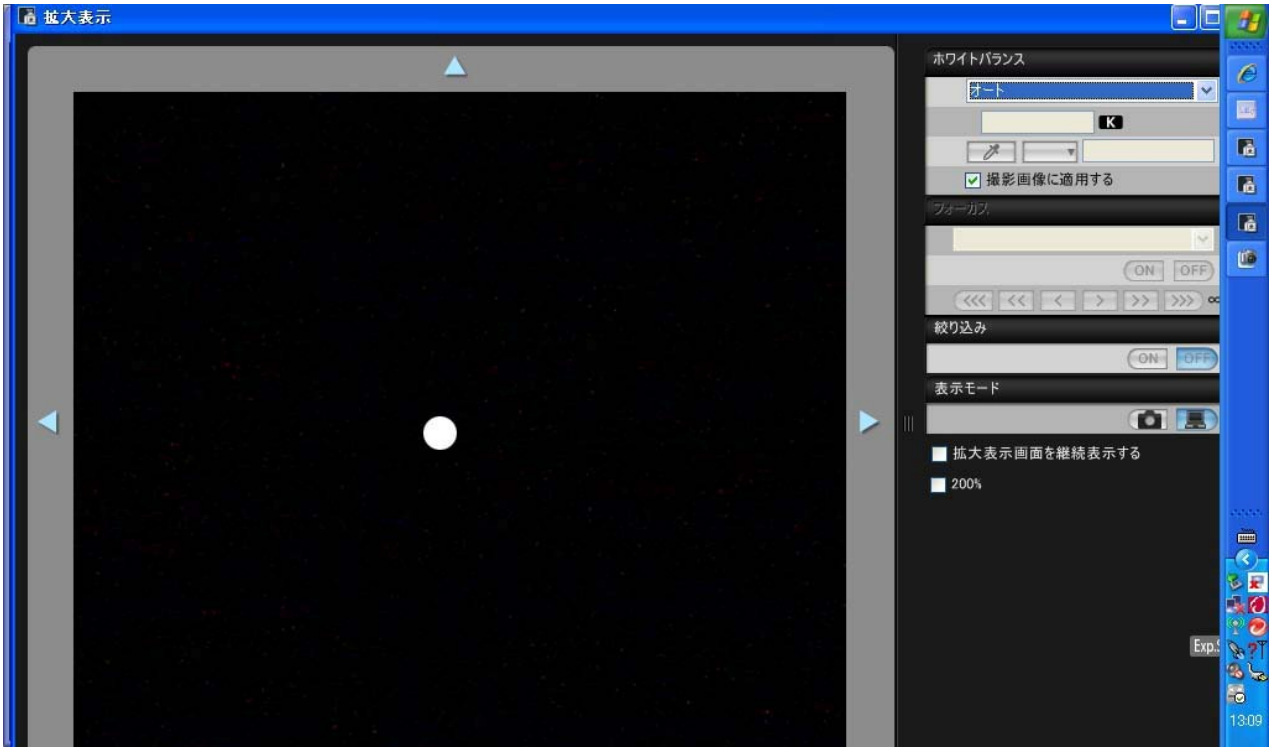


次にカメラのピント位置を、∞の位置に合わせます。そして、ファインダーを覗きながら、明るい星を導入してください。

次に、リモートライブビュー撮影のボタンをクリックします。



星の部分をダブルクリックすると、拡大表示されます。

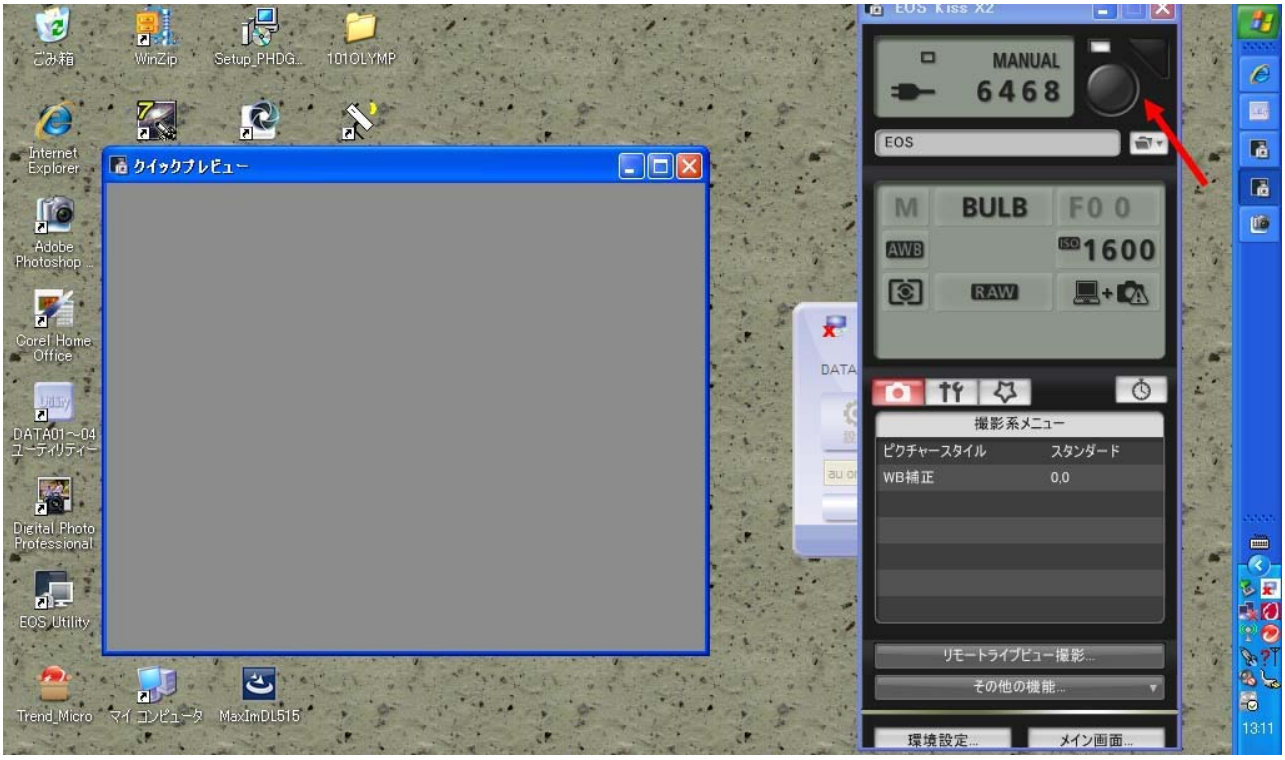


この画面を見ながら、レンズのピントを合わせをします。星が一番小さくなるところで、合わせてください。なお、レンズには自作の F8 絞りが取り付けてありますが、必ず、F8 絞りがある状態でピントを合わせてください。F5.6 開放だと、収差がひどく、どこでピントが合っているか分かりません。
ピントを合わせたら、拡大ウインドウと、リモートライブビューウインドウを閉じてください。

ピントを合わせたら、以後、ピントリングに触れないように注意してください。もし触れてしまったら、ピント合せをやり直します。

対象の導入
ピントを合わせたら、撮影対象を導入しますが、最初は、オリオン大星雲やアンドロメダ大星雲など、明るい対象にしてください。これらの対象はファインダーを覗いても見えますので、導入が楽です。

対象の試写
対象をファインダーで導入したら、試写をします。
その他の機能ボタンから「クイックレビューウインドウ」を開きます。



クイックレビューが開いたら、矢印のシャッターボタンをクリックします。対象にもよりますが、３０秒～1分くらい露出して、もう一度シャッターボタンを押します。

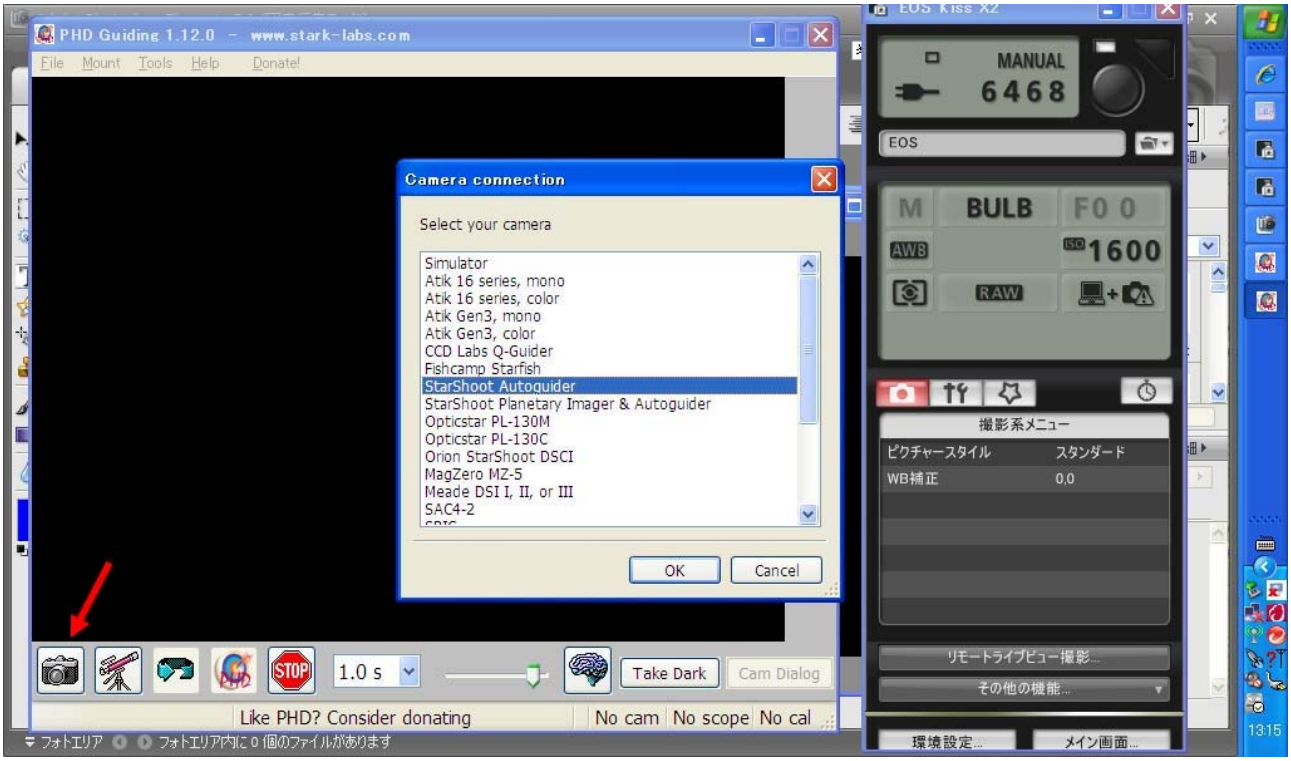
構図の微調整

対象の試写が終了したら、構図の微調整を行います。構図の微調整は近くに明るい星があるなら、リモートライブビューウインドウでその星を見ながら、モータードライブの４つのスイッチで行います。その際、モーター速度を８倍にしておくと良いです。

オートガイド

構図の微調整が終了したら、いよいよオートガイドです。

オートガイダーとパソコンが USB 接続されていることを確認し、PHD Guiding を起動します。



カメラボタンをクリックし、「StarShoot Autoguider」を選択します。